

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2017年度研究成果報告書

| | | | | |
|--|---|----------------|----------------|-------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | | 文学研究科 | 教育学専攻 |
| 研究代表者 (2018年3月現在のものを記入) | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏名 | |
| | 文学研究科・教育学専攻・博士課程前期課程2年 | | 皆川 朋生 | 印 |
| 指導教員 | 所属・職名 | | 氏名 | |
| | 文学部・教授 | | 河野 哲也 | 印 |
| 自然・人文・社会の別 | 自然 ・ 人文 ・ 社会 | 個人・共同の別 | 個人 ・ 共同 | 名 |
| 研究課題 | リチャード・ローティの教育哲学からみた哲学対話を用いた学校教育のあり方について | | | |
| 研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入 | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏名 | |
| | 【研究代表者】 文学研究科・教育学専攻・博士課程前期課程2年 | | 皆川朋生 | |
| 研究期間 | 2017 年度 | | | |
| 研究経費 (1円単位) | (支出金額) 139,082円 / (採択金額) 200,000円 | | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、日本の学校教育の新しいあり方としてローティの教育哲学を基盤とした新たな教育論を構築しようとするものである。そのために以下の方法を用いて研究を行う。

- ①これまで哲学、政治学の文脈で扱われてきたローティの著作を教育哲学の視点から読み直し、彼の教育目標を明らかにする。
- ②ローティの「会話」と哲学対話の比較分析を行うことで二者の親和性を明らかにする。
- ③実際に教育現場で行われている哲学対話の実践をローティの教育論の視点から再記述をおこなう。
- ④以上の分析をもとに哲学教育の研究のなかにローティの理論をモデルとした哲学対話の教育を新たに位置づける。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[教育哲学] [リチャード・ローティ] [哲学対話]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

アメリカの哲学者リチャード・ローティの哲学は、世界的に影響を与え、哲学の他にさまざまな分野で数多くの研究がなされている。しかし、特に日本では教育に関してほとんど光を当てられていないのが現状である。本研究ではこれまで見落とされてきたローティの教育哲学に着目し、彼の教育哲学を理論モデルとして日本の学校教育に応用させることを目的としている。また、その際の具体的な教育実践として哲学対話に着目し、ローティの哲学と哲学対話の実践を関係づけることも行ってきた。本研究によって以下の成果を出すことができた。

①ローティの哲学・政治学の文脈に位置づけて読まれている著作を教育哲学の観点から読み直し、分析を行った。初めに、ローティの教育論の基本的な軸となる「社会化」と「個性化」の概念について概要を述べる。彼にとって「社会化」とはその社会の社会的・道徳的常識を教え込む段階である。これはE・D・ハーシュの文化リテラシーを教え込む教育論の影響を受けながら構想されており、初等・中等教育段階で行われるべきものである。またこの「社会化」をシティズンシップの段階と捉えていることにも注目して研究を進めた。続いて「個性化」とは「社会化」の後に続いて起こる段階であり、「社会化」で獲得した常識を問い直し、自己を再創造する過程である。これは高等教育、特に非職業系の学校(総合大学など)で行われるべきものと考えていた。

この「社会化」と「個性化」はローティが教育について論じた論文”Education, and Socialization, and as Individualization”で論じられたものである。しかし、本研究を進めていくうえで、これまで教育ではなく哲学や政治学の文献として扱われてきた彼の他の著作においても一貫してこの二段階の教育の思想があらわれていることが明らかになった。

『哲学と自然の鏡』においてローティはこれまで哲学史のなかで中心的な位置にあった考え方、つまり人間を実在を映し出す鏡と捉えるような認識論哲学を批判する。そうではなく、人々とのたえざる「会話」によって真理を常に探究しつづける啓発的哲学を提唱する。この啓発的哲学では具体的に、現時点で人々が信じてきている真理を疑い、「会話」というアプローチによって探究して新しい真理へと更新するという活動がなされている。この活動はローティの「個性化」にも通ずるものがある。まさしく「個性化」で行おうとしているものは真理の再記述であり、啓発的哲学によってなされるものなのである。ローティはこの啓発的哲学の考え方を基礎としておきながら「個性化」の過程を構想していたことがわかる。

さらにローティは後の著作で「リベラル・ユートピア」という名の理想社会について論じている。「リベラル・ユートピア」とは「リベラル・アイロニスト」とローティが呼ぶ人々によってつくられた社会である。その社会を作り出している「リベラル・アイロニスト」とは残酷さの回避を行動指針とした人々であり、自分たちが持っているさしあたりの常識や自分が現在もつ観念や語彙(ローティはこれを「終極の語彙」と呼ぶ)を終極のものではないと考え、絶えずそれらを疑いつづけている人々のことである。ローティは理想社会をつくりだすためにこのような「リベラル・アイロニスト」を生み出すことを目指していた。「リベラル・アイロニスト」とはいわばローティの教育目標であったのである。

このローティの「リベラル・アイロニスト」を詳しくみていくと、それらの育成のための過程に「社会化」と「個性化」の思想が含みこまれていることがわかった。「リベラル・アイロニスト」は「終極の語彙」を疑い、問い直すことで自らの「終極の語彙」を更新することを目指す人間である。この「終極の語彙」を疑い問い直す過程はまさしく「個性化」の過程といえる。「リベラル・アイロニスト」になるためには「個性化」の過程が必要と考えていたことがわかる。さらに、ローティは「終極の語彙」を問い直すことを重視していた。すなわち問い直すための「終極の語彙」が必要となる。はじめに問い直す土台となる常識を獲得し、そののちにその常識を疑い、問い直して再記述するという「リベラル・アイロニスト」となる過程は、ローティが「リベラル・ユートピア」を構想し著作として残す以前に論じていたということが明らかになった。

研究成果の概要 つづき

②昨年度から継続して行ってきたローティの「会話」の分析を進めるとともに、哲学対話における「対話」との比較分析を行った。

哲学者で哲学対話の研究を行っている土屋陽介によれば、哲学対話における「会話」と「対話」の違いは方向感覚の有無であるという。哲学対話における「会話」は無目的で向かうべき方向性をもたないただのおしゃべりであるのに対し、「対話」は真理の探究が目的であり、真理へと向かうという方向感覚を持つ。この議論を踏まえてローティの「会話」に立ち戻って考えると、ローティの「会話」はむしろ哲学対話における「対話」と親和性が高いことがわかる。ローティの「会話」も自らの「終極の語彙」を再記述するために存在するのであり、目的や方向感覚をもっている。以上のことから、ローティの「会話」を実践する手法として哲学対話が有効であるという可能性を示すことができた。

また、シティズンシップという観点から、哲学対話と熟議民主主義教育における熟議との関係性についても研究をおこなっていった。熟議と哲学対話は最終的に合意を求めるか否かという点で差異はあるものの、議論する過程それ自体を重視している点で類似したものであることがわかった。さらに議論を通じて能力を育成していくという点においても熟議による教育と哲学対話による教育が共通していることがわかった。以上のことからシティズンシップを教え込む段階である「社会化」の段階でも対話的なアプローチによる教育、ローティの表現を使うならば「会話」による「社会化」の教育の実践可能性を示すことができた。

③ローティの理論研究を行うほかにも、各地で哲学対話の実践を行い、記録をとりながら研究をおこなってきた。特に江戸川区子ども未来館で実施されている哲学対話のプログラムに継続的に参加し、記録をとってきた。本年度はここでの実践を分析し、『立教大学大学院教育学研究集録』に投稿することができた。

会話分析の手法を用いて哲学対話のファシリテーターのふるまいについて分析を行った。哲学対話のファシリテーターは哲学対話の「問い」を出すとき、どのような発言を「問い」として評価しているのかに着目して分析を行った。その結果、ファシリテーターは疑問文の形でおこなわれた発言を「問い」としてみなしていることがわかった。そして、ファシリテーターは同じ質問を繰り返さずという行為を行うことにより子どもたちに自分の発言が要求された形式ではないことを自覚させ、修正を促していた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
 - ・ 皆川朋生「どのような発言を「問い」と評価するのか—子ども哲学における問い出し場面を通じて—」、『立教大学大学院教育学研究集録』第15号、pp.31-39
- ④
 - ・ 2017年度修士論文「哲学教育において知識を教えることの意義—R・ローティと対話による教育をてがかりに—」